

した。然し、其影は狭いので、旅人が這入ると馬子が這入ることが出来ません、そこで、己が這入るのだ。いや己が這入るのだといって、二人の間に議論が始まりました。つまり馬子はこういふのです、「一体、馬を借りたいといつたから馬丈けを借したので、影までも一所に借しはしなかつた、だから、馬の影は、當然、こつちが使ふ権利があるのだ、」すると、旅人は「いや、元來影は當然馬に附いて居るものだ、だから、既に馬を借りた以上はどうしても、影を使用する権利は、己の方になくてはならぬ」こんな具合に、議論をして居たが、とう／＼お仕舞には、議論に花が咲いてなぐり合になりました。其間に馬は、何處かへ駈けて行つて仕舞ひました。

蟻と鳩

一匹の蟻が川岸へ行つて水を飲まうとして居た所を急に波のために、流されて、今にも溺れ様として居ました。すると、其川の上に、かぶさりかゝつた木の枝に、一羽の鳩が止つて居て、其蟻の溺れて居るまゝ側へ向つて、一枚の葉を落してやりました。蟻は、地獄で佛の思をして、やつこの事で其葉に這ひ上つて、無事に、川岸に漂着して、危い所を助かりました。夫から暫くして、此鳩が、或る木の枝に止つて居ると、一人の鳥さしが、竿の前にモチをつけて、下から、そつとさそうとして居ると、彼の蟻は、夫と知つて、其鳥さしの足に思いり食ひ付きましたから、鳥さしは吃驚して、竿を投げる、其拍子に鳩は飛んで行きました

お笑ひ草

一、火事にラムチ

或時のこと、何處かに大火事が出て、とうとう眞向うの大きな家の棟に火が付いたので、消防夫どもは、一所懸命になつて、働いたが、火の手は益々強くなる許りで、中に消え相にもない。所へ、近所の氷屋の主人が走つて来て、いきなり懐中から、小さな瓶を出して、棟の火を目かけて、瓶の中の水を注ぎかけると、忽ち棟の火は、バツタリ消えて仕舞つたので、消防夫どもは驚いて「もし氷屋さん、一體夫は何ですか」と尋ねると、「な—にこれや、ラムネですよ」と答へる。「へ—、ラムネですか、えらい力のものですな」「さようさ、棟(胸)のやけるには、ラムチは、一等でありませんか」

二、師直の墓

浅野内匠頭の墓は、芝の泉岳寺に、大層立派に出來たのに、師直の墓は、まことに小さくて參詣人も少いから、師直の方のお寺の和尚が、これは少し氣の毒だから、せめて、石塔だけでも大きくして上げ様と思つて居ると、或夜のこと、師直の幽霊が和尚の枕もとへ出て来て「此度、己の石塔を立て直してくれるのは辱じけないが、どうか夫丈けは、見合はせてくれ」といふから和尚は「夫でも、浅野内匠の方の方は、あんなに立派に出來て居るに、あなたのの方は、如何にも小さくて、見すばらしいから、せめて、大きな石に建て直さうと孝へますので」といふと、幽霊は、急にブルブルと身震をして「わ、夫だ、其大石には、もう懲を致したのだ」